

館蔵資料紹介

秀頼版 「帝鑑図説」(慶長11年刊古活字本6冊)

わが国にはじめて活版印刷術が伝来したのはキリスト教伝導師による天正末年のことであるがこの西洋式印刷法は、ほどなく為政者の布教弾圧に伴い、広く普及するところとならなかった。

これより数年おくれて文祿初年、豊臣秀吉の朝鮮の役により李朝からも中国起源の活字印刷法がもたらされた。この東洋式の活版印刷法は従来の整版(木版)印刷にかわる簡便な手段として、いち早く各方面で注目されることになり文祿・慶長より元和・寛永に至る近世の初頭この方式による書籍の開版が相次ぎ、ここに古活字版の盛行の時代が現出した。

皇室では後陽成天皇が文祿2年に「古文孝経」を出版(文祿勅版)なされ、続いて慶長中頃までに「錦繡段」「勸学文」「四書」「古文孝経」「日本書紀神代卷」「職原抄」「白氏五妃曲」などを大型の木活字で次々と刊行(慶長勅版)せられた。

そのうち慶長2年刊の「錦繡段」と「勸学文」にはその巻末の跋文に近來の朝鮮活字印刷法によって印行した旨がしるされている。

医師の小瀬甫庵や如庵宗乾なども文祿5年より慶長のはじめにかけて「補注蒙求」「十四経發揮」「本草序例」「医学正伝」「東垣十書」「医方大成論」「元亨釈書などを刊行した。

また、徳川家康は慶長4年から11年にかけて「孔子家語」「貞観政要」「三略」「六韜」「周易」「七書」などを伏見の円光寺で印行している。

こうした活版印刷による書籍の開版事業の活況を目のあたりにして、あるいはまた、ことに家康の伏見版の刊行に刺戟を受けたものなのか豊臣秀頼もまた開版のことを企て、活字植版と整版彫刻の技術を駆使して、慶長11年に「帝鑑図説」6冊を出版した。

これは全冊に豊富な挿絵を伴うことで当時刊行の古活字版の中でも特に異彩を放ち、世に秀頼版として珍重されている。

「帝鑑図説」は明の張居正・呂調陽の撰にな

る帝王の鑑戒の書で、時の皇太子のために上代より宋代におよぶ歴代諸帝の善悪の政績を引きこれに解と図を配したものである。

豊臣秀頼は幼少にして聰明、好学の気風あり朝夕この書を愛読し、よって翻印開版を行うに至ったという。このことは、巻尾に付された慶長11年の西笑承兌の跋文にみえる。

秀頼版の印行が何処でなされ、誰れが関与したのかは定かでないが開版の行われた年、秀頼はわずかに14才であった。

この秀頼版「帝鑑図説」の承兌の跋文の付いた伝本は有跋本と呼ばれ内閣文庫、東洋文庫、日光天海蔵および弊館(甲本、欠第1・5冊)に所蔵されている。

所掲の館蔵乙本[写真1]は、この承兌跋の二葉分が欠落した慶長11年刊本(横山重氏旧蔵)である。

袋綴、藍色原表紙(市松模様空押)、29.1糎×19.8糎、四周双辺(22糎×14.2糎)、有界、每半葉9行、每行19字、解は本文より低1格、挿絵(四周双辺19.5糎×28.4糎、前集81葉、後集36葉)、版心黒口花紋魚尾「前(後)(丁数)」、題簽(後補)墨書「帝鑑図説 前乙(～四、後一・二)」、内題なし、序題は書名に同じ、前集(第1—4冊)・後集(第5・6冊)に分れる。

第1冊の前集巻首に「聖哲芳規」の四字を半葉ごとに大字草体で刻出し、続いて陸樹声の叙(萬曆癸酉仲春吉日)3葉、張居正・呂調陽の進図疏(隆慶六年十二月十八日)4葉、前目録5葉がある。また、第5冊の後集巻首に「狂愚覆轍」の四字を同じく半葉ごとに大字で草刻し続いて後目録3葉があり、第6冊の末尾に王希烈の後序(萬曆元年孟夏之吉)3葉を付す。

本文は一葉ごとに組版、解版が行われており、前葉の使用活字が次葉にも出現する。木活字は新彫したもののごとく頗る精美で伏見版にも比肩しえよう。第1冊首の進図疏のうち前序第7葉表第5・6行にあたる2行分は単体活字でな

唐史紀元命義和敬授人時義仲者端夷運東作
 藏敬者南交理(南此)和仲居味谷理西成和敬君
 朔去理朔身又訪四岳藏敬登庸
 諸君史上記帝義在位任胤賢臣與國治聖即
 時賢臣有義氏兄弟二人和氏兄弟二人帝義
 著他四箇人敬授人時使義仲居於東方鳴鹿
 之地管理春時耕作的使使義教居於南方交
 明之地管理夏時耕作的使使和仲居於西方
 時谷之地管理秋時耕作的使使和敬居於北



写真1 慶長11年刊「帝鑑図説」巻首

方幽都之地管理冬時更易的事又訪問四岳
 之官著他務舉天下賢人可用者於是四時舉
 帝舜為相那時天下賢才都聚於朝廷之上百
 官各舉其職帝垂拱無為而天下自治堯天
 下可以一人主之不可以一人治之雖以帝堯
 之聖後世莫又然亦必待賢臣而後能成功書
 曰股肱惟人股臣惟聖言股肱具而後成人良
 臣衆而後成聖意亦謂此其後帝舜為天子也
 跟著帝堯行事任用九官十二牧天下太平乃

写真2 [左]慶長11年刊本 [右]丙本(異植字版)

く、整版の手法で扁平字体を密彫した長方形の齧を植版している。挿絵(整版)は全冊合せて117葉の多きを数えるが、その図柄は明刊本と比較して、やや変化が加えられている。

各冊に当時の朱墨訓点、朱線が施こされ、上欄などに墨筆の書入れ、誤植の訂正がある。なお、第6冊末尾に後第81葉が誤綴されている。

秀頼版「帝鑑図説」で付記すべきは、この慶長11年刊本に続いてそのやや後に印行された無跋の異植字本が存在することである。これは過ぎる昭和49年の秋、館蔵の丙本(欠第6冊・小汀利得氏旧蔵)[写真2右]と有跋本との対査、大阪府立中之島図書館本との照合により明らかになったものである。

この異植字本は慶長11年刊本よりいく分、厚手の料紙を用い、先行本の誤脱を補訂しているところもあるが、かえって新たな誤植も多い。

本文や版心部分に活字の顛倒や横転などもみられ、組版は概して粗雑になっている。木活字の磨耗が目立ち、版面の墨付きも一様でない。挿絵の部分は先行本の整版を重用しており所々に部分的な損傷が出ている。第1冊首の前序第7葉表第5・6行の2行分は先行本の長方形の齧を用いず改刻している。

第6冊末尾の承兌の跋を欠くいわゆる無跋本は比較的多く、諸庫にその所在が知られているが、これまで版種の区別がなされておらず、す

べて同版本として一律に取扱われてきた。

しかし筆者らがこれまでに実査しえた範囲では、大阪府立中之島図書館本(西大路藩主市橋長昭侯旧蔵)と弊館本(丙本)のほかには尊経閣文庫本(整版刷り題簽付)、福井市立図書館本(墨書外題)、宮内庁書陵部本(横転活字を植換え訂正)、名古屋市蓬左文庫本(挿絵は一部に別版を補配)の諸本も後出の異植字本と認められる。なお、近ごろ国立国会図書館参考書誌部人文課貴重書室主査五十嵐金三郎氏がこれら秀頼版伝本の総合調査を進めておられるので、ほどなく諸本についての詳細が判明するものと期待される。

おわりに本稿をなすにあたって、故長澤規矩也博士をはじめ大阪樟蔭女子大学木村三四吾教授、金城学院大学杉浦豊治講師には何かとご指導をいただいた。また、前内閣文庫と漢書専門官福井保氏、前名古屋市蓬左文庫主事織茂三郎氏、大阪府立中之島図書館主幹多治比郁夫氏、天理図書館特別本整理係大内田貞郎氏、陽明文庫主任名和修氏、内閣文庫図書専門官長澤孝三氏ならびに秀頼版をご所蔵の諸館の関係各位にはお世話になることが多かった。ここに厚く感謝の意を表する次第である。

(中央図書館運用課長 森上 修)